

おとなりのえふだ

それは1月の、日曜日の朝のこと。わたしが温室で、みんなにお水をあげてるときだったんです。

「つぼみ。ひまわり、って　ここにゑるか？」
上から降ってきた声にわたしが顔を上げたら、いつきが立っていました。

その後ろではコッペさまが、キコキコ音を鳴らせながら片手を動かしています。

手の先には乳母車^{うばくめ車}。中ではわたしの妹——ふたばちゃん^{ふたば}が、まだ眠っています。

そんな、なんだかふしぎな光景でした。

このころは、こうして温室にゑることが多くなりました。

机の上にしがみついてばかりだと息がつまるから。

温室で、コッペさまとふたばちゃんに囲まれて勉強したほうが、楽な気分なんです。

ときどき、えりかも一緒に勉強しますし、ね♡
でも　この日は、違ったんです。

「ひまわり、ですか？」

わたしは思わず首かしげながら聞き返しました。

いつきが来ること自体、めずらしいです。もうじき高校受験の私とえりかに遠慮してか、最近はおまじり会つこともなくなっていたのですから。

「うん。お兄さまが、またちょっと風邪^{かぜ}を引きこんでしまつてね。でもぼくも、生徒会の仕事でなかなかついていて上げられなくて　そうしたらね、『ひまわりでもあれば、いつきの代わりになるんだけど』とか冗談^{冗談}っぽく言つてさ」

ひまわり　そうですね。いつきのイメージそのままですから。

いつきのお兄さんも、おからだ丈夫じゃありません

3 おとなりのえふだ

んし、妹に近くにいるほしいのはわかります。いきもいつきで、高一ですぐに生徒会長さんになっちゃいましたし、忙しいのもわかります。けど

頭のなかに、温室の花たちをひとつひとつ思い浮かべます。おおきな、ちいさなの、背の高いの、低いの。何百もあります。けど。

「ごめんさい、いつき。この温室にも、ひまわりはないんです」

「そう。仕方ないよね。いいよ、ただのついでだから」

ついで、ですか？

「はい、これ。前に言ってたでしょう」

そう言っつて、いつきがポケットから取り出したのは、手にちょうど収まる一束のカードでした。

「ああ、花札ですね。ありがとございます、いつき。ほんと、この子。ふたばちゃんが、シールになつた花札の絵を欲しがつちゃつてしょうがなかつたんです」

言いながら、わたしは乳母車を指さしました。

キコキコ音を鳴らしながら揺れている、乳母車。ここに連れてきたときはいつも、「ツベさまが動かしにくるんです。」

なんだか、嬉しいですよ

そんなこと考えてたら、いつきがそつと乳母車を覗きこみました。

「花の絵が好きなんだね、ふたばちゃん。お姉ちゃんに似た子になるのかな？」 あ、笑つた♡

そう言っつていつきの方がきれいに笑つてます。

本当に、かわいいものが好きなんですよね、いつきは♡

「じゃ、ぼくはこれだね。お花の世話と受験、がんばつて」

手を上げて温室から出て行くいつきを見送りながら、わたしはちよつとだけため息ついちゃいました。出て行くちよつと前につぶやいたいつきの声、聞こえちゃつたんです。『冬にひまわり、かぁ』つて。

「力になれないのは、辛いですよね」

カタ、カタ

あら？

いま、乳母車が揺れた気がしましたけど

「気のせい、ですよ。さ、奥の方の花にもおみずあげて、勉強はじめましょうか」

「やつほー、つつぼみっ コツペさまも、おっは

よ あれ？」

朝の温室、今日は学校お休みだし、この時間なら妹つれて花の水やりしてるだろうなー、っと思って来たんだけど。

おはよう、えりか君

聞こえてきた声はコツペさまのだけだった。ま
コツペさまの声って、今はあたしとつぼみと、つぼ

みのおはあちゃんにしか聞こえないから、他の人にはひとりごと言う寂しい子、に見えるかな？

カタ、カタ

おっといけない。

「コツペさまだけじゃないや。あんたもいるんだもんね、ふったば♡」

まあこの子、コツペさまがあやしていると泣きもしないから、つい忘れちゃうんだけどね。あ。

「花札だ。いつきが持ってきたのかあ。ほら、あんたのでしょ？」

コツペさまの前のテーブルに置いてあった花札を開いて、乳母車の中においてあげたとたん、ふたばの目が開いたよ。なんか、喜んでる感じ。さっすが、花好き姉妹だねえ。

「ま、よかつたじゃない。きれいな花の絵たくさん見て、センスよく育つちやいなよ。お姉ちゃんよりもね。なーんて」

5 おとなりのえふだ

あはは。どうせ聞こえても意味なんてわかんない
だろうけど、ひとりでこんなこと言っていると自分で
照れちゃうなあ。

あ、ひとりじゃないか。コッペさまが聞いているん
だ。とは言っても、コッペさまもヘンなツツコミ入
れる性分じゃないから、別にいいけど

(ひまわり)

ん？ ひまわり？

(ひまわり、いつき、ほしい)

ああ、いつきのひまわりね。そう言えば、こない
だ道で会ったとき言ってたっけ。ひまわりがあれば
自分の代わりになってくれる、とか。いつきのお兄
さんもメルヘンな人だわ。

「そうだねえ。今が冬じゃなけりや、買ってでも、い
つきにあげられるんだけどぞ」

(ひまわり、きいろ?)

って、こぼら。

「ちよっと待ちなさいよ。ひまわりでしょ、黄色く

て大きな、は・な！」

(ひまわり、ここ、ある?)

へ？

「なーにスツとぼけたこと言ってるの。夏の花がこ
の季節にあるわけじゃないでしょ、つぼみ？ いつまでも
とぼけてつと、つぶすわよ っ、あれれ？」
振り返ったけど、そこにつぼみがなくなつて、い
たのはコッペさまだけ。

そういえば、温室に入った時からいなくなつたよね、

つぼみ

どうしたね、えりか君

考えてたら、コッペさまの声が響いてきた。あた
しとつぼみ、つぼみのおばあちゃんにしか聞こえな
い、声。

「いや、その、えーっと」

でも、さっきのはこの声じゃないよね。聞きちが
い、かなあ。幻聴 いやいや、そんなトシじゃな
いって!!

「な、なんでもないよ、コッペさま。ちよつとセリフの練習してただけだつて。あは、うははは」

「どうかしましたか、えりか」
うっひゃあ！

「い、いきなり現れないでよ、つぼみっ!!」

び、びっくりしたあ。もう、やっぱさっきの声、つぼみだつたんじゃん！

「ちよつとつぼみ！隠れてスツとほけたこと言ってくるなんて、趣味悪いよ、このぺた胸ムスメ！」

目の前で、ジヨウ口持ったつぼみが一瞬ぼかんと顔してから、ほっぺたふくらませた。

「なに訳のわからないこと言ってるんですか。わたしがぺたなら、えりかはぺたぺたですっ!!」

あ、あれ？

ぺたとぺたぺたはどう違うのかな？

つぼみの反応みて、あたしの勘違いかな、どうもまかそうかな、って思ってたら、

「決まっています。ぺたは あら？」

「こ、コッペさま。聞いてた、よね？」

居たんだよね、さつきから。しまつたあ、ついふたりだけのつもりになつてたよ。

うむ。聞きなれぬ言葉だつたからな。意味くらはは理解しておきたい

「聞きなれない ああそつか。つぼみのおばあちゃん、ぺたじゃないもんね」

「いえ、昔からそうだつたかはわかりませんよ？」
フラワーは違うのか。 子供と大人の違いと

いうことが？

「ええつとお」

あーっ！話の終わらせ方が見えないっ!!

まあよい。我輩わがはらは少し用事ができたようだ。

ゆっくりしてゆくとよい

あ、ラッキ♡

「うん。気をつけてね」

あたしは即、大きな手で手を振った。よしよし、こ

7 おとなりのえふだ

れでなんとかごまかせ

「って、ありゃりゃ。いきなり消えちゃうことないじゃないのさ」

散歩かなあ。まあ、もうコッペさまがこのへん歩いてたって、みんな気にしやしないけどね

「きゃああつっ!!」

キーン

耳が痛い。すぐ近くですっごい声出すんだもんなあ、もう!

「なによ、つぼみ。ヘンな声だしちゃって っととと!?!」

いきなり、つぼみがあたしの胸元につかみかっしてきた?

「ふ、ふたばちゃん、ふたばちゃんは、どこ行ったんですかっつ!!」

ふたば? って、そんなの、乳母車の中で寝てるに決まってる えええっ!!

つぼみにつかまれながら、なんとか後ろ向いたあ

たしの目に、乳母車が入って来なかった。

さっきまでいたところには、花札がパラパラって落ちてるだけ

カタ、カタン

ん? なに、この音。なんか、さっき聞いたような気がするけど。

「あああ 大変です、わたし、わたしがついていたのに」

つぼみはがっくり膝ついちゃったけど、あたしはそのまま、音の聞こえるところを探してみた。だって、おもしろいもん。乳母車ごとなくなるなんて

あれ? いま、なんか動いたよ、ね?

間違いない。あたしとつぼみしかいないはずなのに、なんか色が動いた。虫なんかじゃなくて、明るい色のなにか あ!?

「ああああつっ!!!」

あたしは思わず叫んじやったよ。さっきのつぼみより大きな声で。だつてさ、

「いたっ、乳母車！ 花札の、中つつ!!」

「あああ、ふたばちゃああああん」

札にさわっても、紙の感じがするだけです。中には、入れません　そうです！

「へん、変身しなくちゃです。待っててね、ふたばちゃん。いま、シブシを呼んできま　」

「　って待てこらあつ!!」

ピシッ！

あ、いたたた。なにかで叩かれました。なにが

あ、あれ、腕が動かない　？

「なんですかえりか！ 離してくださいっ!!」

「いーかげんにしろつての！ 変身のときの風で、花

札みーんな吹っ飛ばすつもり!!」

え？　あー！

「ちよつと落ち着きなさいよ。あたしだけの頭じゃいい考え浮かばないのよ？　もう、さっさとガリ勉メガネの頭をみせろつてば!!」

すっごい声でまくし立てられて、耳を塞ぎたくなつた瞬間に、聴こえてきました。すっごく、小さい声。

『　お願いだから』

そう　でした。えりかが心配してくれないわけないんです。ひとつ息すつて　うん。

よく見れば、きれいな札です。蝶ちようちよちよが牡丹ぼたんにとまってる　この風景が見たかつたんでしょつか？

あ。

「乳母車が、動いています。札の反対側に行こうとしてるみたいですね」

「ひょつとしてさ、反対側に行いたら、そのまま」つちに出てきてくれる、とか？」

えりかが、ちらつとこつちを見て言いました。そう、だといいです。わたしはうなずいて、札をじつと見てみます。

ゆっくり、乳母車が動いて、動いて、反対側の端について、そして そのまま、消えちゃいました。

「えー」

せつかく、待ったのに、いなく エーリーかあー

「わーかった、わかつたつてば。ほら、いいから見つけよ、きつと別の札にいるんだつて、ね？」

いきなり抱きかかえられて、背中やさしく叩かれて、それでやつとわたしは顔を上げられました。

そうです。次です。次！

「あ、いましたー！」

ばらばらに散らばってる花札の中を一枚つつ探してたら、つぼみが声あげた。

「え？どいどい？」

さつき失敗しちゃったから、あたしはちょっと離れて探してたんだけど。どれどれ

「これです。まあるい月の下のまあるい山」

ゆび指してるの、赤い背景の札だね。黒くて丸い、山つばいの上、ちうちちい三角にもつとちうちちい車 ほんとか。よく見つけたなあ。

「山の形に沿って、乳母車がまあるく登っているんですよ。かわいいなあ、ふたばちゃん♡」

は、いいんだけど。声までハートにしちゃってさ、目的忘れてんじゃないでしょうね？この姉バカは。

つていつか、さあ。

「へんだよ、これ」

「え？なんでですか??」

あたしが先に気づいてどーすんだ、つての。

「だってさあ、なんで乳母車が勝手に山を登ってくわけ？」

下るんならわかるんだけど。ふたばが自分で動かせるわけないじゃん、ねえ？

「ああ　ほんとですね。あ、下ってく」

「そう、下っていくよねえ。登った時と同じで、ゆっくり」

ふつう、転げ落ちるよねえ？

「あっ　！　そう、ですね。だれかが動かしてるん
しか　」

だれかが、かぁ。ん？

「コッペさま　いないよね？」

「コッペさま？　さっき、用事ができて出かける
か言ってませんでしたか？」

用事が、できた？

「それって、まさか　」

あたしは思わず札をつかみとって、近くでじっと見てみた。ちっちゃい乳母車がゆっくり動いている後ろの、三角形のシルエット。

「やっぱり、コッペさまが押してるんだ。でも　」

山を降りた乳母車とコッペさまがそのまま札から消えてくの、見てるしかないじゃん。どうすりゃいいって

「次、探しますよ、えりか！」

思わずため息つきそうになった瞬間、背中からつぼみの声が聞こえてきた。

しょうがない、とにかく札をめくりまくるしかないかぁ。

はあ、はあ　あー、疲つかれたあ。

散らばった札をめくっちゃテーブルに集めるの、もう何回くりかえしたんだろ？

「ねえつぼみ。あたしらってなーんでこんなことしてるんだっけ　？」

テーブルに寄っかかってちょっと休みながら言ったら、

「き、決まっています。乳母車とふたばちゃんを捜すためですっ！」

つぼみの声がキツくなった。そりゃ、わかつてるんだけどね。

「それだつてさあ、コッペさまがいつしよ、つてわかつたんだもん。まかせときゃいいじゃない？」

ふへへ、つてテーブルに頭乗せて、見上げた温室の天井が暗くなった。あれ？

「なんてこと言つんですかっつ!!」
び、びっくりしたあ。

なにさ、つて言おうとしてよく見たら、つぼみの大きな目。またなみだいっばいためてさ。

「わたしの手の届かないところで、なにが起ころるか分からないのに放つとくなんて それじゃ『おねえちゃん』だなんて言えませんっ！」

えりかだつてわかるでしょう、妹なんだから！」

あー うん。まあ、ね。
ちよつと、思い出しちゃったよ。ずいぶんちよつちや

い頃のこと。いろいろとね。

「ごめんごめん。んじゃ、ちよつと休んだらまた探そっか」

「つぼみい、いたあ？」

「いません〜」

あーもつ、なん回くりかえしてるんだろ、この会話。

あきらめないのはいいけどさ、数十枚もあるつてのに、いまどこかなんてわかるわけ ああ、また札

が裏返つちやつてるよ。まったく、分厚くてちよつちやいくせに、なんでこうこうさくさくひっくり返つて

ちよとまつてよ？

「つぼみ、さつきつから、札ひっくり返してる？」

「そんなわけないじゃないですか。絵を見なくちゃ、どこにいるか あら？ たしかに、いくつかひっ

くり返つてますね」

勝手にひっくり返った、ってこと？

「ひよっとして、なにか関係　おっと」

へたなこと言つて、また泣かれちゃマズいもんね。
んじゃ、あたしだけで、よく見て

ぱたぱた

あ、裏になつてる札が動いた。せえ、の

「これだっ！」

あれ？　なんか葉っぱがたれてる木に、カエルが飛
びついでる絵だ。

「えりか、見つけました？」

「ごめん、ハズレみたい」

「そつですか　あ、えりか、それ当たりです！」

へ？

言われて覗きこんでみたけど、あいかわらずカエ
ルが葉っぱに飛びついでるだけ　ん？

「葉っぱじゃない！　これ、コッペさまの手？」

他の木よりきれいな緑がたれてる。ほんのちよっ

と、身体も見えてるし。

「つかまえ　」

おもわずコッペさまの身体のとこ、ぎゅっと掴ん
だら、

ふあつくしよいつ！

うわっつ！

「な、なんですかいきな　うぶっ！　」

札が、みんな飛び跳ねたあつ！？

「ふあ、ふあにひやつたんれふか、へりかあ　」

ああ、そつか。こつちからさわると、くすぐった

ことになるのか。って、だーれが『へりか』だ！

ひとこと言つてやるうと頭あげたら、鼻おさえてる

つぼみがいた。あー、顔に札ぶつかつちやつたか

「ちよ、ちよっと、ね。　つぼみ、札はそーっと

持ったほうが、いい、つぼい、よ？」

「やつぱりえりかのせいじゃないですかあー！」

鼻をゴシゴシすりながら、こつちジトツて見て

るの感じながら、あたしはまた探し始めた。

「あーっ！もう、どこ行っちゃったのよ、コッペさまはっつ!!」

「本当です。どこに行っちゃったんでしょ。ついさつき、やっとみつけたと思つた松の絵の札は、松の木になっちゃってますし。でも

「コッペさまが押してるっていうことは、ちゃんと考えて動いてるはずですよ。多分、順番通りに動いていると思つてんです」

「順番、つて言つてもあ　ううっ！　札の順番なんて覚えてなうっ！」

「はあ、そろそろ限界がもしれません。えりかも私も、花札のことはまったく知らないのですから

そう考えていたら、

「松は1月。だから、2月の梅じゃないかな？」

背中からいきなり声が聞こえてきました。

「へ？だ、だれ　あ、いつき?」

「うん。ちよつと忘れ物があつてね。二人とも気づいてないみたいだから、しばらく見てただけだなんだかすごいことになつてるね」

いつき　　「つて言いながら、えりかが抱きついていました。ええ、気持ちはいくわかります。花札を持ってきてくれた、いつきなら！」

「いつき、花札のルールとか、詳しいですよね?」
「昔やったことがあるから、一応は知つていますよ。」
「で、梅の札はある?」

「待つてください。えーつと　あ、これです。でも、いませんよ?」

目に入った梅の札を取つて差し出しましたが、いつきがちよつと困つた顔して、

「それは『梅に鶯』だから梅の札だけど、さつきいたつていうのは『松に鶴』じゃなくて松に短冊なんだよね。だったら、梅の短冊札じゃないかな。こ

う　七夕で笹につけるようなものが描いてある札
 なんだけど」

「知ってるよ。赤タンでしょ？」

「そうそう。ええと　あ、それだ」

わたしの横を、いつきが指差しました。

わたしもすぐその先を見て　いました！

「コツペさま！あ、ああ　」

短冊と梅の花の脇に見えていたコツペさまと乳母
 車が、またすぐそのまま…

「消えちゃった、ね」

えりかの声で、自分がぼおとしちゃってるのに気
 付きました。　でも！

「でも、今度は大丈夫ですよ。1月の松から2月の
 梅、ちゃんと行き先がわかりましたから。いつき、3
 月は何ですか？」

あら？　おかしな顔してます。いつき。

「移動するかも、って思っつて、3月の札は持つてた
 んだ。3月は桜なんだけど　いないんだよ」

わたしたちに見せてくれた、桜の札4枚。たしか
 に、どの札にも乳母車やコツペさまはいません。

「月の順に移動してるわけじゃないんですね　」

横しまの幕をかけた桜、お花見みたいな札をもらっ
 て、じつと見てもやっぱりいません　はあ。

「だつめだなあ、いつきも」

ぼそつとした声を聞いて、いつきの肩がぴくつと
 しました　え、えりかか!?

「えりか、なんてこと言っんですか！

たとえひとカケラの役にも立たなかつたとしても、
 いつきが悪いわけじゃありませんっ!!」

あ、あら？　いつきが、いない？

いえ、よく見たら、目の前でしゃがんでました。い
 つき。

どうかしたんでしょうか？　そう思っていたら、ぼ
 ん、と肩に手が置かれた感じがして、ため息が聞こ
 えてきました。

「　あたしも悪いけどさあ。あんた、素で言っつて

るから100倍ひどいと思うよ。つばみ」

え、あ、いえ、その

わたしはただ、その場でペコペコするしかありませんでした。あううう

「あらあら、みんなで何をしているの?」

「いつきがなんとか復活して、わたしたちがぼおっ
としていたら、また背中から声が聞こえてきました。
いつもの、あつたかい声」

「おばあちゃん!」

「まあまあ、なあに? みんなすごい顔してるわよ」

「おばあちゃん、おばあちゃんです! ああ、なんだ
か、後光がさして見えます。これで」

「大変なのよ。コツペさまが乳母車ごと、花札の中
に入っちゃって」

わたしを押しつけたえりかが、飛び出してそう言

いました。そうです。ほっとしてる場合じゃありませんでした。

「早く出てこないとお母さんが探しに来ちゃいますっ!」

でも、

「ふうん あら」

「おばあちゃんは平気な顔で、いつもコツペさまがいる席に歩いて行くと、なにかを手にとりました。なんででしょう?」

「ふふふ。大丈夫よ。ちゃあんと帰りの時間は準備してるじゃない。さん、にい、いち」

シリリリリリリリリリ

な、なんですか、これ!?

うむ。もう帰る時間か

え? コツペさま!?

「ど、どこ?」

ああ、ここだここだ

わたしの持つてる花見の札がぴょん、と跳ねて、横
しまの幕がいきなりめくれ上がりました!?

いま一周したところだからちようどいい。帰る
としようか

そう言った瞬間、目の前のテーブルが見えなくなり
ました。その代わりに、緑の三角とちいぢやな車
ふたばちゃん!!

わたしはすぐに駆け寄って中を覗きこみました。そ
こには、にこにこした笑顔。消えたときのままのふ
たばちゃんが♡

あら? 消えたときと、ひとつ違います。ち
いぢやな手に、花が一本。黄色くて、大きな花
菊、ですよ。

この札の中で見たと言っておったのでな
え ?

いつきくんが探していたから、見つけて欲しい
と頼まれたのだ。それで、一緒に札に入ってきた。

一緒に、ってことは ふたばちゃんが!?

「ちよつとふたばあ、あんたそれって むぐぐぐ
ぐ!?!」

「ダメですつっ!」

思わずえりかの口を押さえました。

「え? あ、なに、つぼみ?」

いつの間にか、いつきが隣にいました。けど
あ、そうでした。コツペさまの声、いつきには聞こ
えないんですたっけ。

「頼まれて札の中を探したが、ヒマワリはなかった。
済まぬな、いつきくん」

「え ?」

「コツペさまが、声を音にしてる——!?

わたし、思わず顔を上げてコツペさまを見つめま
した。この姿で声を耳で聴いたのは、はじめてなの
ですから。

「そう ですか。ありがとうございます、コツペ
さま」

そのままいつきは、乳母車をのぞき込んで、言ったんです。

「きみが、探してくれたの？　ありがとう、ふた

ばちゃん。嬉しいよ」

にっこり笑ういつきの顔。作り笑いには、見えません。けど、

「いいんですか、さつき？」

「うん。もともとお兄様とぼくのわがままだからね。つぼみの妹がくれた、って言えば喜んでくれるよ」

そう言っ、また笑ういつきが、なんだか眩しいです。あ、あら？　なんだかふたばちゃん、顔が赤くなつたみたい？

「いつきを選ぶかあ　けっっこうなメンクイじゃない、この子。あなたと同じでさ」

え、えりか

「将来が楽しみよねえ、お・ね・え・ちゃん♡」

まあ、よく似た姉妹だとは思うな。吾輩も。

「コッペさま？」

友もよく似ているようだし、な。

わたしたちをじっと見つめてそう言っているの

すが　え　っと？

「なに落ち着いて言ってるのよ。こっちは心配したんだからね!!」

それは済まん。札からすぐ出られるのはわかっている、思い込んでいたのな。

「そんなん、わかるわけないじゃん！　今までやったことないんだから！」

本当です。せめて一言、わたしたちに言ってくれたいれば

そうか　いや、そうだな。うむ。

あら？

ちよっとだけ目で宙を見上げてそう言うコッペさまに、わたしはなんとなく、思い出すことがある

気が

「まあまあ、またこんなにしちゃって。ふふふ」

「なんだかもやややっている、おばあちゃんが札を見ながら笑ってます。なんででしょう？」

「ほあら、つぼみ。よく見てごらんなさい。コッペの通ったところ。地面にちよつと長いまるがあるでしょう？ 足跡よ、それは」

「言われてみてみると ああ、なるほど。さつき気づいていれば、もっと早く追いかけたらなんでしょうけど。」

「やっぱり松が好きなのよね、ふたばちゃんも」

「おばあちゃん？」

「ほら見て。他は1種類だけしか通らない札もあるのに、松だけは全部通ってるでしょう？」

「本当です。松の札は、鶴のいるのも赤い短冊のも、松だけなのも。みんな、コッペさまの足跡が」

「ふふ。思いつかないかしら？」

「え？」

「札の中のコッペを見て、松が動いている、動いている、って言うって。すっごく喜んでいたわよね」

「え、と、それって」

「わ、わたしですかあ!？」

「ぱつと顔を上げたわたしの目線の先で、コッペさまが後ろを向きました。」

『——よく似た姉妹だとは思わな。吾輩も』

その背中から、聞こえた気がしたんです。

なんだ。な〜んだ。

「ええ、似たもの姉妹です。わたしたち♡」

「やれやれ、って顔のえりかと、菊を大事そつに持ついつきの間で、わたしは心からほつとしてました。」

—おしまい—